博士（文　学）　野　村　恭　史

学位論文題名

ウィトゲンシュタインにおける言語・論理・世界

－『論考』の哲学 その生成から崩壊まで－

学位論文内容の要旨

本論文の主題は、オーストリア出身の哲学者ウィトゲンシュタインの前期の哲学である。ウィトゲンシュタインの哲学は、前期と後期でかなり異なる相貌を示すが、そのいずれもが現代哲学に多大な影響を及ぼしている。このうち前期の哲学にあたるのが、著書『論理哲学論考』で展開された哲学であり、本論文の副題に登場している『論考』という名称は、この著書の広く通用している略称である（以下でもこの略称を使用する）。

ウィトゲンシュタインの前期の哲学は、その重要性にも関わらず、なお多くの謎に包まれている。その原因の一つに、次のような難問がある。『論考』では、日常言語の一意かつ完全な分析が可能でなければならないという要請が掲げられているものの、その分析によって到達されるはずの「完全に分析された言語」の具体的な姿が明示されていない。そこでその姿を明らかにしようとするさまざまな解釈が提出されてきたが、それらは皆、「完全に分析された言語」の要素命題が相互に論理的に独立でなければならないとする『論考』のもう一つの要請を満たすことができなかった。

本論文では、この難問に対して、二段階に分けて分析を進めることにより、興味深い解決が得られている。まず第一段階では「完全に分析された言語」（以下、本論文での命名にしたがい「LW」と呼ぶことにする）の構文論と意味論が、『論考』に掲げられている諸条件に基づいて可能な範囲で、図式的な形で与えられる。続く第二段階では、この言語 LW の具体化が追究される。すなわち、LW の図式的な構文論と意味論にしたがい、なおかつ具体的な内容を語ることのできる言語の可能性が検討されるのである。その成果として本論文では、感覚質タイプを、LW の単純記号によって名指される「単純な対象」とみなす解釈のもとで、「分割記号法」という特殊な分類体系を採用することにより、要素命題の相互独立性を確保しうることが示されている。

以下、順を追って各章の要旨を記載する。まず第一章「プレ『論考』期のウィトゲンシュタイン」では、『論考』の哲学の形成に大きな影響を与えた二人の哲学者フレーゲとラッセルが取り上げられる。とくにラッセルに関しては、ラッセルがタイプ理論の導入により集合論のパラドクスを回避しようとしたのに対して、それを批判し、タイプ理論そのものを回避しようとしたウィトゲンシュタインの苦闘が、『論考』の哲学へと結実して行く様子が分析されている。その途上で、命題において名どうしが特定の仕方で関係しあうことによって、事態を構成する対象どうしの特定の関係の仕方が意味されるとみなす「実質的事実シンボル」説が放棄され、命題において名が関係しあうことに、コプラの果たす役割と同様の形式的役割のみを認める「形式的事実シンボル」説が採用されるにいたったことが指摘され、この知見は、後の分析に活かされることになる。

第二章「像と形式」では、『論考』のテキストに登場する「形式」概念を六つに区別し、

相互の関係を明確化した後、命題に関する『論考』の「像理論」が、要素命題における名どうしの関係を形式的事実シンボルとして扱っていることを確認している。

続く第三章「言語 LW の構文論」では『論考』で想定されている「完全に分析された」言語 LW の構文論が、第二章での像理論の分析に基づいて、図式的に提示されている。これが図式的なものにとどまるのは、LW の名が何種類あり、LW の要素命題には何種類の形式があるのか、等々の点を『論考』が特定していないからである。それらは、論理の適用に属し、論理そのものには属さないとみなされていたのである。そこで、それらの点を任意にしつつ図式的に構文論を与えた本論文の手法は、ウィトゲンシュタインの論理思想の LW による忠実な再現を可能にするという効果をもつことになる。しかも本論文は、今日「真理表」と呼ばれている図表そのものを命題記号とみなしたウィトゲンシュタインの命題観をも、構文論において忠実に再現している。

続く第四章「言語 LW の意味論」では、名の種類に対象の種類が対応し、要素命題の種類に事態の種類が対応するという仮定のもとで、同様に図式的な LW の意味論が与えられている。こうして構文論と意味論が図式的に与えられることにより、構文論的概念と意味論的概念との関係を論ずることが可能になる。その結果、命題の間にある構造的内的関係と命題の間の論理的帰結関係とが対応するとする『論考』の主張が成り立つことが確認されている。

第五章「『論考』の世界観」では、こうして LW のありうる姿が限定されたことをうけて、LW の単純記号である名の意味にあたる「単純な対象」の条件を満たすものは何かという問題が論じられる。ここでは、『論考』以前のノートで検討されていた分子説、質点説、色斑説、論理実証主義者達以来のセンスデータ説等が退けられ、感覚質タイプを対象とする解釈が擁護されている。この解釈は、センスデータ説と同様に要素命題を直接経験の記述とみなす余地を与えるとともに、センスデータ説によっては満たされなかった対象の条件をも満たすというメリットをもつ。本論文ではさらに、この感覚質タイプ説を、「分割記号法」という特殊な分類方法と組み合わせる解釈が提案され、検討されている。その結果、分割記号法のもとでは感覚質タイプはきわめて人工的な仕方で分類されることになるが、その代償のもとでなら、感覚質タイプを単純な対象とみなすことにより、要素命題の相互独立性の要請を満たしつつ、LW の具体的解釈を与えうることが明らかにされている。

続く第六章「論理形式について」では、『論考』の像理論の頂点とも言える、論理の「鏡像」説が分析されている。これは、命題の間の論理的内的関係が事態の間の内的関係の像となっているという主張であるが、『論考』においては、真理表そのものが命題記号とみなされているため、命題間の内的関係は、真理表の間に成立する構造的関係として捉えうることになる。そこから本章では、そのような関係が像と現実の間に共有されるとする『論考』の思想は、対象領域の有限性の想定と、要素命題の論理的相互独立性の想定を帰結として伴うという解釈が提出されている。

最終章にあたる第七章「『論考』の体系の崩壊」では、この二つの想定が、その後のウィトゲンシュタインの思索の進展に伴い否定されるにいたり、後期の哲学への思索の運動が急速な展開を開始すると論じられている。とくに色の相互排除問題がついに要素命題の相互独立性の否定へと導いたことと、無限な対象領域の考察が量化命題の真理関数への還元の否定に導いたこととが、遺稿からの豊富な引用により確認され、『論考』の哲学の崩壊が描き出されている。

学位論文審査の要旨

主　査　　教　授　　山　田　友　幸

副　査　　教　授　　植　木　廸　子

副　査　　教　授　　小　野　芳　彦

副　査　　助教授　　中戸川　孝　治

学位論文題名

ウィトゲンシュタインにおける言語・論理・世界

－『論考』の哲学 その生成から崩壊まで－

本論文の主題であるウィトゲンシュタインの前期の哲学は、現代哲学に広範な影響を及ぼしたにも関わらず、なお多くの謎に包まれている。本論文は、このような現状を生み出す原因の一つでもある、ある解釈上の難問に対する解決を含む形で、ウィトゲンシュタインの前期哲学に解明を与えようとするものである。

ウィトゲンシュタインの前期の哲学とは、著書『論理哲学論考』（以下、「『論考』」と略記する）で展開された哲学を指す。『論考』では、日常言語の一意かつ完全な分析が可能でなければならないという要請が掲げられているが、その分析によって到達されるはずの「完全に分析された言語」の具体的な姿が明示されていない。そこでその姿を明らかにしようとするさまざまな解釈が提出されてきたが、それらは皆、「完全に分析された言語」の要素命題が相互に論理的に独立でなければならないとする『論考』のもう一つの要請を満たすことができなかった。

本論文では、この難問に対して、二段階で分析を進めることにより、興味深い解決が得られている。まず第一段階として第３章と第４章では、「完全に分析された言語」（以下、本論文での命名にしたがい「LW」と呼ぶ）の構文論と意味論が、『論考』のテキストに基づいて確定可能な範囲で、図式的な形で与えられている。この図式的な定式化は、いわゆる「形式的再構成」の試みの一つに分類できるが、今日「真理表」と呼ばれている図表そのものを命題記号とみなしたウィトゲンシュタインの命題観を忠実に再現している。これは、従来の「再構成」には見られない本論文独自の貢献である。

さらに本論文では第４章において、この図式的に定式化された構文論と意味論に基づいて、構文論的概念と意味論的概念との関係が検討され、命題の間にある構造的内的関係と命題の間の論理的帰結関係とが対応するとする『論考』の主張が成り立つことが確認されている。これは、本論文の定式化の適切さを確証する成果である。

続く第五章では、こうしてLWのありうる姿が限定されたことをうけ、第二段階として、LWの単純記号である名が指示する「対象」とは何かという問題が論じられる。そこでは、『論考』以前のノートで検討されていた分子説、質点説、色斑説、論理実証主義者達以来のセンスデータ説等が退けられ、感覚質タイプを対象とする解釈が擁護されている。この解釈は、要素命題を直接経験の記述とみなす道を開くとともに、『論考』の形而上学にも適

合するというメリットをもつ。本論文ではさらに、この感覚質タイプ説を、「分割記号法」と組み合わせることにより、要素命題の相互独立性の確保が可能になることが示されている。分割記号法のもとでは、感覚質タイプはきわめて人工的な仕方で分類されることになるが、その代償のもとでなら、感覚質タイプを単純な対象とみなす解釈のもとで、要素命題の相互独立性の要請を満たしつつ、LW に具体的解釈を与えうるということが示されたことは、学術的に貴重な貢献である。

また本論文では、『論考』の哲学の形成過程を分析し、要素命題における名どうしの関係を「実質的事実シンボル」とみなす見地が放棄され、「形式的事実シンボル」とみなす見地が採用されたことを跡付けた第１章、『論考』のテキストに登場する多様な「形式」概念を従来より詳細に分類し、相互関係を解明した第２章、近年刊行されはじめた新資料をいち早く活用して、『論考』の崩壊過程を分析した第７章においても、学術的に価値ある新たな知見がもたらされている。

ただし第７章での分析に関しては、ここで主題とされているような一つの世界観の崩壊の過程は、一挙に解明し尽くされうるものとは考えにくいため、なお多面的な検討の余地があることも予想される。また第６章で、『論考』の論理思想が対象領域の有限性の想定を伴うとしている議論には、いささか性急な面もないではない。

このように、なお検討の余地のある点も一部含んではいるが、これらは、既述のような本論文の成果の価値を減少させるものではない。何よりも本論文は、上記のような多くの独自な貢献を伴う優れた論文であり、全体としてその学術的価値は非常に高い。とりわけ LW の構文論と意味論を図式的に定式化することで、LW のありうる姿を限定したうえで、感覚質タイプを LW の単純記号の指示対象とする解釈により、『論考』の形而上学に適合する LW の具体化を追及した構想は斬新であり、得られた成果は国際的な貢献をなしうる水準に達していると評価することができる。

以上により本委員会は、全員一致で、本論文の著者野村恭史氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。